

G-25

特49:  
533

85  
401

青根温泉志  
完

今井農學士序文  
蓑笠學人編著

永澤氏藏版

青根温泉志序

天は萬物を生ずる豈に偶然ならんや、海濱に魚鹽の利あり、山谷に鑛泉の恵あり、而して人世の苦境にも亦樂土の存するあり、然

るも苦樂亦一ならず、或は耽慾荒淫以て生を貪るもれあま、清雅

高尚以て世を樂むものあり、徒に生を貪る者與に語るに足らず、眞

に世を樂む者得て山水の秀靈、雲烟の變幻を説くを、惟ふに鑛泉

の効は専ら治疾にありと雖も、其興味に至りては、蕩邪流惡、氣を吸

ひ神を暢ぶるに外ならず、ウアルトノ氏曰く、景色の變換も、亦一二

の疾、病を治するの効あり、例へば鬱閉症の患者、都市を去りて開豁

の地に移り、周圍の綠陰なる山水の幽景を遍覽して、遂に快治する

の如きと、以て證をるし、仙南青根温泉場の山高々、水清く、眺臨の爽

豁なる、屋室の雄壯ある、吾縣下三十餘泉に、卓絶す、是を以て四時來



り澡浴せる者、年に十萬人に下らんと云ふ。余嘗て青根に遊ひ、その造化は大觀を賞ふ。また一書の之を記述せしものなきを惜先。近頃、知友永澤君、温泉志を著はし、余に校閱を請ひ、此書素と零々たる一冊子に過死と雖も、克々其梗概を悉せり。謂ふる、青根温泉の知己ありと、夫れ山靈地異、何もの人の稱揚と、竝たさらん、而して今や景と書と相映て始めて完璧を成す。余復た何をの惜まんや、寄語す、世の精神を養ひ、樂土を探らんと欲する人、一たひ此好侶を携へ、飄然去て朝には不忘閣畔に清泉を掬ふ、暮には翠幃館上に光風を弄し、以て天の萬物を生ずる實に偶然にあらざると知む。是と序とす。明治二十四年七月下澣、仙臺僑居南窓下、よ於て。

今井秀之助撰

自序

佐藤醫學博士嘗て温泉誌の必要を論じて曰く、人生を養ふ乃法多しと雖も、之を要するに、身體と精神を養ふの兩途に外ならざるなり、而して之を養ふの法、少なからずと雖も、自ら弊害なしとせず。余の常に兩なから之を養ふに、最も益多く、害少なき者を温泉となす。抑も温泉の健康に益あり、疾病に効あるもの。各温泉中有効の物質を含みて、諸般に體質或は疾患に適應するに因るのみにあらず、加ふるに土地多く閑雅幽邃、樹木蒼鬱、空氣新鮮。自ら山水の景あり

二  
て人の神思を暢はしむるに由なり。然り而して温泉に浴する者は固より豫め温泉の効用利害より土地の寒暖高低浴法等に至るまで詳かに知らざる可からざ。近頃世俗を見るに浴泉大に行われ温泉の効用を詳かにせずして漫りに痼疾を山谷に載せるものあり。却て害を招ぐに至る。偶々温泉に由て廢を起る。奇驗を見るものあるべしと雖も。是必竟温泉に由て病を試むるの徒のみ。僥倖と云ふべしと。余の斯篇に於けるも亦此意に外ならず。然れども素と薄識寡聞。特に醫事に暗し。焉んぞ克く虎を畫て犬に類するの

誹を脱れんや。唯頼ひに諸大家の校閲に勞を取らるゝと。平素聊か抱負する所あるを以て。自ら喘らむ操觚の重任を負ふ。浴者これに依りて以て萬一を裨益せば。啻に余の面目たるのみならず。また泉主の大幸あらん

明治廿四年七月下浣

編者 識

## 凡例

- 一 本書の温泉主の需に應之拙著宮城縣鑛泉志中より本泉に關する記事を轉載せる所なり故に其詳細を知らんと欲する浴客は請ふ鑛泉志に就て一讀の榮を垂れよ
- 一 書中氣候の温度は華氏檢温器と以て、泉質之設氏を以てす
- 一 本書の已に諸學士及び諸名家に校訂を仰ぐと雖も印刷の際校正の疎漏なりしより往々誤脱なきにあらざる第二版を俟て増訂を加へんと欲す覽者諒焉

編者誌

### 浴者心得

抑々鑛泉の効能は、全たく其中に含ひ所は諸成分に由ると雖も、亦此一點にのみ歸す可きも、此にわらず、土地は高低氣候の寒温、近圍の風景、浴場の陋美、食物の良悪等と、皆奏功の如何に關係を有すれを、若し其詳細を知らんとする病浴客は、須らく良醫の指揮に従て、潔浴するを良とす、况んや鑛泉浴療の目的は、重に慢性諸病に應用するにあれば、假令輕微なりと雖も、之を急性諸症に濫用す可らず、又其應用法の如きも、泉質の異同、強弱疾病の種類、輕重等に因て、差異あるものなれば、固より一定の準規を以て、編纂す可らずと雖も、通常心得となるべし、要件を左に摘載す。

第一 鑛泉療法に適應するは、時期は本邦に於ては、凡そ四月一日より、十月一日に至る間と、最良の期と爲せども、土地氣候は、寒暖に因て、適宜伸縮せざる可らず、又温暖の地に於て、冬期浴療を爲さんとせむ、宜しく浴室の構造に注意して、隙風の竄透を防ぐ可き装置をせし。

第二 療病者入浴時日の長短、其人の體質、及鐵泉感應の強弱に因て各異なる所あれを、之と定むること甚だ難し、然れども三週間を以て通規と爲さば大過無きもれ、如し固より病症の模様に従て之を伸縮するを勿論なれども、連綿入浴して四、五週間の久きに彌るの却て惡し

第三 浴場に著し身、体疲勞せるもれの飲食と定め、静息して攝生と守ること一二日後、飲用、浴用と始むるを良とす

第四 飲用法の分量も、鐵泉は性質と、病性、體質に由て一定せず、例へて含鐵泉は如き、食鹽泉或は亞爾加里性炭酸泉に比すをば、大に其量を減せざる可らず

凡そ飲用の先づ少量、五夕乃至二合五夕、一日より始め、患者適宜に量に至るも、一日の量凡五合五夕と超ゆ可らず、又俗間に浴槽中の不潔泉を飲用するものあれども、是れ大なる過失なり、飲料の必ず泉源の清潔なるもれに就き、温度高きに過ぐると畏れ、放冷して適宜に至らしめ服用す

べく、又必老急忽にせず、徐々に爲すを要す、其適當は時は、朝は七時、八時夕は五時、六時、頃と良し、飲服後少しく運動を爲すべし

第五 入浴は一日一回、或は二、三回、患者は適宜に由るべき、朝は八時、九時夕は五時、六時と長期とす、而して空腹及満腹れどきの共に宜しからず、然るに浴度多ければ効能速ならんと妄想し、一日數回は浴と取を爲し、に皮疹、浴熱等を發し、甚だまきに至つては危篤の患害を招ぐものあり、必らず多浴を慎むべし

第六 入浴中の時間と、温度との亦鐵泉は性質と、患者は病性、體質とに由て同トからず、初時の概えて入浴時間を短くし、漸々之を長くすべし、即ち初の十分時より漸く慣れて堪ゆるに従ひ、長さの三、四十分に至ることをあり、凡そ成分少量なるもれの刺戟少なきを以て、他の強性鐵泉より、長く浴するを得るもれとす

温度も亦病性、體質等に從て同一ならず、本邦に於ては習慣に由て高度

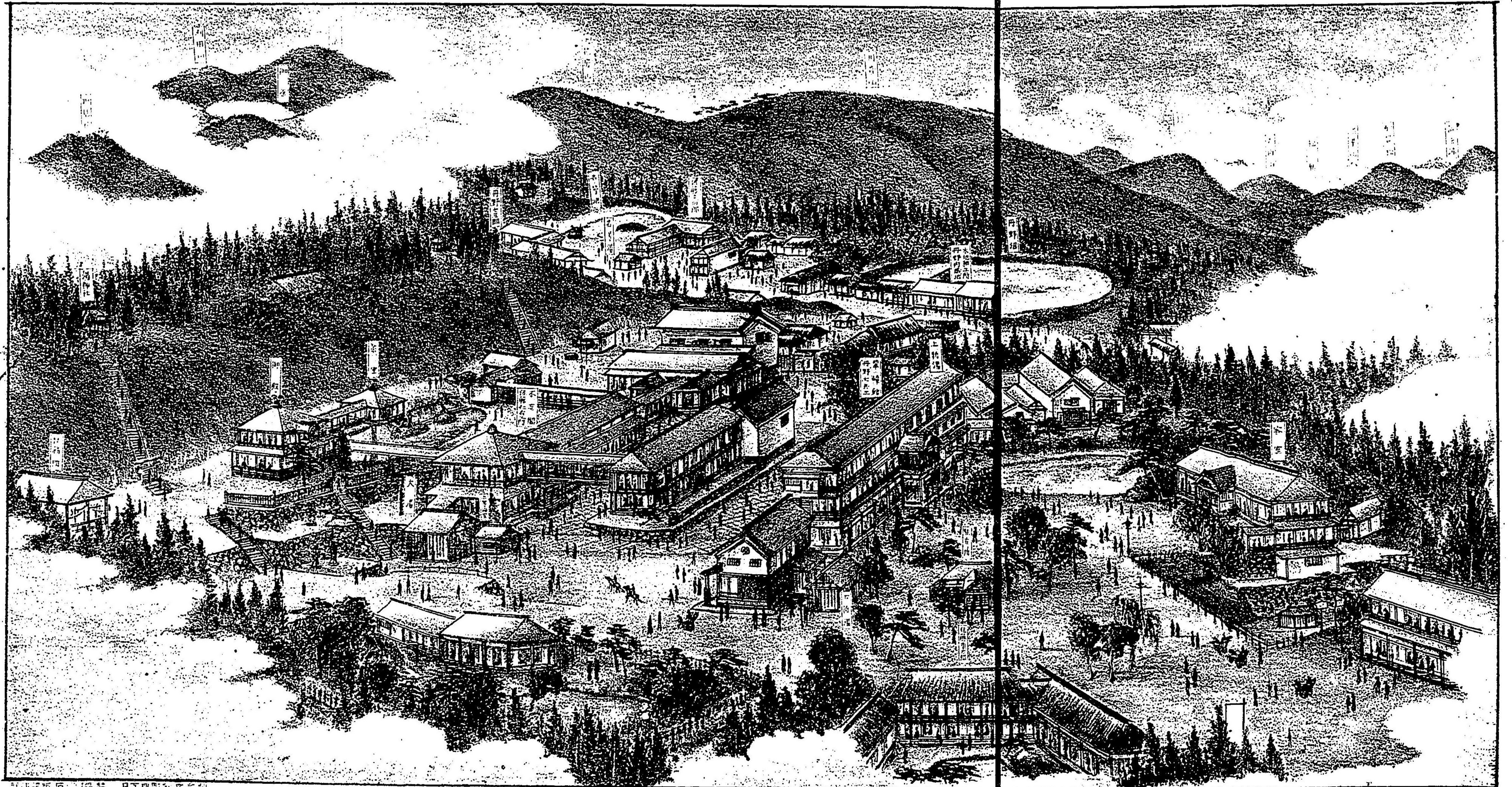
の温を用ゐるもれ多し然れども高度の温と用ゐるは宜しからざるこ  
と多き温度の冷なるも攝氏二十九度より以下なるべからず熱なるも  
攝氏四十度左右を超ゆべからず但し醫師の特に冷熱を指揮するもの  
は此限外なりとす

第七 浴後の乾きたる浴巾と以て全身を拭ひ乾かし強く摩擦するを良  
とす而て直に衣服を着し晴天の日は三十分位の散歩をなし雨天あ  
らば室内に於て適宜運動するを良とす然れども倦疲れて之を好まざ  
るもれ強てなす可らず

第八 入浴の間若し皮膚疹を發すると死は一時中止するか或は鑛泉に常  
水を混ト稀釋すべし又入浴れ爲先に發熱することあり然るときは數  
日浴と止め飲用と減す可し又世には甲泉に入浴して未だ數日と經ざ  
るに更に乙泉に移り次で丙泉に轉るものあり是は徒らに身体の疲  
勞を増すのみにして効驗も亦少なければ必ず禁すべし



前國青根温泉場全景



地理

青根温泉は陸前國柴田郡古書に芝田とも書せど川崎村字前川にあり、柴田郡は國の極南に位るし、東南は磐城國刈田伊具、亘理の三郡と互ひに境界を接し、北は全く名取郡に包まれ、西は大山脈を限りて山形縣羽前國と隣る、郡中山岳多く之より流出する大小の河川も亦頗る多し、東西九里、南北六里、面積十九方里にして戸數は三千七百餘に殆く、人口凡そ三万を有し、前川の往時、砂金莊に隸し、獨立の村名なりしが明治二十二年、今宿、小野、川内、元砂金の四村と合併して今名に改むる所なり

此地より東北、川崎驛へ山道三里、西南、岨々温泉へ一里半、東南、遠刈田温泉へ一里十三丁余を距て、大河原鐵道停車場へ七里半とす、而して仙臺に通ずるに二道あり、之を右すれば永野宮、大河原は諸驛を経て直ちに瀛車

に投ずることと得、且つ道路平夷に於て車馬を疾驅せしむるに便われを十六里半の長途を僅かに半日を費さるべく、又之を左して川崎驛を通過すれば、行程十二里に充たされども、中間諸處に山阪ありて馬にあらざれを通せず、聞く本年此地と遠刈田間に馬車鐵道を敷設す、専ら浴客來往の便と圖るに計畫ありと

位置

温泉場は不忘山の分脈、花房山に中腹なる青根と稱する地にあり、西方に不忘山を距つて、西北に花淵山二十と控へ、西南に物見岩倉石山半一里と望む、而して六方山四丁川音岳十五等と北方に並峙するを以て、地勢は自づから雄壯高隆にして海面を抜くこと殆んど二百四十丈、遙かに東南の二方を開く、之を遠くして、桃生、牡鹿の諸勝を歴々、眼下に點綴し、之を近くしては、宮城、名取、黒川の峯影、水態、盡とく坐席に入り來る、その開豁の眺望は、以て管内各温泉場を壓倒すべし、人家十四戸あり、五戸は温泉宿を營

み、他と皆浴客に需用物を齎ぎて生計となす

地質

地盤は安山岩より成立し、地味は同岩の壞爛、朽敗したるものに、古代火山の噴灰を多量に含蓄す、試みに一握の土塊と取りて器物に盛り、靜かに水にて洗滌すれば、小粒の土壤と悉とく去りて、器底に大粒の砂石殘留すると見るべし、是れ其證左なりとす、地震は最も少く、且つ輕微にして、未だ災害を蒙りてなすことなしと云ふ

飲料水 水は飲料、雑用ともに、筧を以て、谿谷の清泉を導び、來るもの數條あり、其距離三四町より半里に餘る、就中二種の水質検査表と左に掲ぐ

青根温泉場水質検査成績表

飲料水	臭	味	清濁	亞硝	アンモニア	コロイド	硬度	有機物	顯微鏡所見
○	淡	透明	痕	○	一、四	二、〇	一、九〇	極微	僅微の

(明治廿二年三月陸軍一等軍醫正中泉正氏試験)

雑用水	○	淡	透明	微	○	一、七	二、五	三、六	九	少量ノ植物殘渣
-----	---	---	----	---	---	-----	-----	-----	---	---------

備考 表中記載せる處の物質の檢水十万分中に含有する量にして  
飲、雜雨水共に谿流の引水なり

### 氣候

土地高峻なるが故に寒氣猛烈にして、殊に冬期は西北に強風多く、室内にて華氏廿五度に降ること無きにあらず、然れども夏日の空氣清涼に去て炎暑苦熱れ候すら猶ほ九十度に騰らず、積雪と最高二尺餘に及び、毎歲十二月に降り三月に至りて消解す、而して曇天雨日に、泉温を増し、風日には稍熱度を減す、若し大雨の後、谿水漲るときと泉量も亦著るしく増加するを常とす

### 浴場

温泉の涌口は三ヶ所にして浴室六宇あり、即ち大湯、瀧湯、上等浴室、上新湯、下新湯及び名號湯とす

大湯 浴室を距る數步、佐藤仁右衛門居宅の傍はらに涌出づ、埋樋を設けて之を導びく、泉源の頗る廣大なるを以て、その泉量の多き世稀に見る所に、二條の瀑狀をなして浴池に瀉ぐ、泉質は透明瑩徹能く池底は秋毫も數へ得べし、浴室六間は廣潤清麗にして浴池五間半の軟石を以て之を疊む、傍はらに上等浴室一間半あり、大湯と導びき、賓客澡浴の用に備ふ

瀧湯 大湯を導びきて浴室と東數十間、崖腹に造る、又下新湯は室内に一浴池あり、これまた大湯を導びく

新湯 源泉の浴室三間半の西北、八丁餘れ谿間に涌出づ、導管を敷設して之を引來り、大湯の北、數十間の處に浴池一間半を造りて上新湯と稱し、更に之と大湯の東、丹野七兵衛門前にある浴室三間半の浴池二間半に導びきて下新湯と名づく、此他枝泉を名號湯の傍らに引き、方一間許の小浴槽と据ゑ入浴に供するもれあり

名號湯 大湯の北凡そ二丁、日吉小祠の下より涌出づ、長十間許の埋樋を

以て浴室二間の傍に導びき、爰に一池と穿ちて溜溜せしめ、更に篋を以て浴池に注ぐ、浴池は木造にして其大さ殆んど上新湯に同一

泉質

大湯 宮城縣衛生課の試験に據れ、此温泉は弱鹽類泉に屬す、其定量試験の成績は左の如し(泉温四十三度、浴池の四十度)

硫酸加留母	〇、〇六一六	硫酸那篤留母	〇、二三七二
格魯兒那篤留母	〇、〇八五一	炭酸那篤留母	〇、〇七八七
炭酸加兒瘦母	〇、〇三八〇	炭酸鉄	痕跡
有機物	痕跡	游離及半抱合炭酸	〇、〇七八七
硅酸	〇、〇四二〇		

固形物物量(一リール中)〇、五四二六

新湯 全上試験に據れ、此温泉は鹽類泉に屬し、大氣温二十九度のとき、泉温五十六度、浴池の四十二度にして、泉質の透明無色且つ無臭なるも

褐色れ沈着物あり、其浴池に溜溜するもの、稍白濁を帯び、中性の反應を呈し、味ひは大湯と同之、稍鹹澁なり、其定性試験の成績は左の如し

硫酸亞兒加里	多量	鹽化亞兒加里	中量
格魯兒那篤留母	少量	炭酸石灰	少量

固形分れ含量は大略一千分れ三

名號湯 全上試験に據れば、此温泉は鹽類泉に屬す、其定量試験の成績は左の如し(泉温五十二度、浴池は四十三度)

硫酸加留母	〇、一〇八〇	硫酸那篤留母	〇、二一七五
格魯兒那篤留母	〇、三五一七	炭酸那篤留母	〇、一五二三
炭酸加爾瘦母	〇、〇九八一	重炭酸亞酸化鉄	痕跡
有機物	痕跡	硅酸	〇、〇四八五

游離及半抱合炭酸〇、一三一四

固形物物量(一リール中)一、一七五

効能

大湯及名號湯醫治効能 各種慢性癱瘓質斯及び仮性關節強直或ハ慢性筋肉彎縮性慢性痛風諸厥衝或ハ創傷後の滲出物或ハ組織肥大例令ハ慢性肋膜炎子宮周圍蜂巢織炎骨盤内膜炎等ハ滲出物を吸収し其肥厚と解散す神經機亢盛の諸症或ハ各種神經の痲痺久經の腦脊髓中風中變過敏依ト昆垓里歇私的里神經衰弱症等に効あり

但新發ハ腦中風脊髓勞腦腫瘍等より來る漸進痲痺にハ禁すべし婦人生殖器ハ慢性諸病貧血諸病及萎黃病腺病又は重病後ハ快復期慢性皮膚諸病頑固潰瘍遲鈍性創傷癩瘡及ハ骨瘍慢性貌禮篤病腎孟加苔兒其他累久ハ煤毒水銀劑療法後等の患者にハ其時期と選ビ用ゐて効あり  
新湯俗傳効能 金創打撲疝氣挫傷湯火傷蟲類咬齧毒癩癩質斯痔漏腸胃諸病赤白帶下皮膚諸病婦人生殖器諸病脚氣等なり

來歴

大湯 傳ヘ云ふ昔時本郡前川村字八澤屋敷に佐藤彦惣なる者あり天文十五年四月佐藤喜右衛門丹野七兵衛佐藤權十郎等と相伴ふて深く山徑に入リ農具を編製する料にとて古き櫛木と伐採し乃ち樹皮と剝がんと根傍に近づき其周邊より温氣微かに昇騰して沸々湯泡を發生す四人怪みて地を穿つこと未だ幾尺ならざるに泉一を獲たり櫛木俗に呼んで青木と云ふ依て青根温泉と名づけ是とて四人居と此地に移し互に協力して荆棘を闢き湯槽と設け以て澡浴に資す爾來連綿として子孫今日に繼續す

按ずるに彦惣の後裔佐藤仁右衛門所持の古文書に其祖先は八澤豊後と稱し寛正年中(凡四百三十年前)まで前川村八澤屋敷に住し世々川崎の城主砂金佐渡の家老たりしが天正年間掃頭の代より二男彦惣を青根に移すの一項あり前説と符合す然れども青根名稱の起源に至りては頗る卑俚に近くして容易に信ぜざるに青根は北海道舊土人語の所謂イワチナイイワチ約すればワチにしてアチと通トナイも亦子となる即ち温泉涌出地の義とす或はまゝ單にワチナイ即ち善知鳥澤の義歟善知鳥ハ俗にウトフ鳥と呼び其形雉子鶴に似

青根温泉

て大小鴨に類し。嘴は太くして前尖り。眼下肉つきの處高く出でたり。故に海邊。又ハ山脈の高く出でたる崎をウトフといふ。古より我奥州の方言に止まらざる。遂に地名と成れるもの多し。是れ皆舊土言ヲチ即ち善知鳥より其意義を取り來りてウトフ崎なと稱せしものにして。現今に至るも猶不諸所にウ(王)澤若くはチウ(翁)澤乃地名を存するハ。其源をヲチ澤に發するもの多し。美濃國御岳驛東のウトフ村。信濃國のウトフ坂(鳥頭と書す)等も亦概ね此類なりとす

此地を距る三里許にして八幡窟あり。危巖數百尋。下に孤洞を存す。傳へて源義家朝臣東征の時暴雨を避けたる乃故跡となす。洞中空濶にして二十餘人を容るゝに足る。是れ豈に往時巖穴居の遺物たらざるを知らんや。是を以て察するも。青根の稱は蓋し第一第二第三兩説中。そ乃孰れに當るを正しとす

新湯 此湯は初め享保五年六月、彦惣等子孫の發見する所に係り一たび開湯せしも、通路險惡にして浴するもの極めて少なかりしより、幾もなくて廢湯に歸す、其後榛莽の中に埋没して世に知られざること數十年なりしが、明治八年再び之を掘鑿し、遂に埋樋を通りて今の浴室に導びき、同年十一月を以て浴用に供せり、故に此稱ありと云ふ

名號湯 天文年間、彦惣等の開始する所にして、發見は大湯と同時にあり、口碑に名號湯は病者彌陀は名號を唱へて入浴すれを、宿痾忽ちにして癒たるより起れりと傳ふれども、奥羽觀迹聞老志青根温泉下に曰く、東北有古温泉曰女御湯と、又寛永十九年五月二十五日、青根屋敷竿入持高調の古記に、妙子下屋敷と記し、封内風土記、柴田郡前川村は條に曰く、按湯泓有二、其一號大湯、中畧其二號妙護湯、下畧と、又一説に、泉源に阿彌陀佛の堂あるを以て名づく、と諸説區々にして其孰れか眞なるを詳らかにせず

### 湯戸

泉主にして温泉宿を兼ねるものすべて五戸あれを、一時に千二百餘名の宿泊に充つるに足る、皆湯泓に傍ひ業を營めり、それ大湯に接し、新湯に隣るもれを佐藤仁右衛門、丹野七兵衛、佐藤重太郎の三戸とす、仁右衛門の古來不忘閣と稱し、大小八十は客房と備へ、舊藩の頃永々湯守を命せられ、七兵衛は翠嶂館と稱し、三層の高樓を興して、客舎を九十七區に畫し、重大郎は道南に二十の客室を有して、新湯と相對す、又名號湯に屬する者は、佐藤

文四郎、丹野七三郎は二戸にして、各々二十個の坐席を有す、之を要するに青根の浴室より坐席器什に至るまで、萬般に清潔善美を盡し、就中建築の宏壯雄偉なるの、その風光は佳絶と併せ賞して、管内無双と稱するも、亦敢て誇言にあらざるべし

凡そ浴客の湯戸に投するや、必らず旅籠、自炊何れにか依らざるべからず、旅籠之を上、中、下、三級に區別し、一晝夜は宿料は上等を金三十五錢とし、中等を二十八錢とし、下等を二十四錢とす、而して自炊は油代を除き、薪炭料、湯錢とて一日金八錢より六錢五厘の間を納る、普通は寢具一襲は損料の、一週間金二十六錢乃至三十四錢にして、その特に暖衾錦褥に起臥せんと欲せむ、須らく五拾錢以上壹圓五拾錢を投するを要す、又一週間貳參圓の席費を拂はし、一室を擧げて客の自用に充つることと得べし

需用品 日常必需品は、概むね之を温泉宿に備へ置き、野菜果實の類は、毎朝市場に於て求むることと得れども、若し欠乏を告ぐるときは、直ちに大河原、村田の二驛、刈田郡白石及び山形縣等に仰ぐが故に、不自由と感ずること極めて少なく、朝夕は鬼石原牧場搾取の濃厚なる牛乳を飲用するの便あり

### 浴客

従來の経歴に依れば、浴客総数は例歲十万人以上に及ぶ、蓋し此地は尤も夏秋の遊浴に適すと、刈田岳登攀の行者夥た、一々に因る、多くは子宮病、上衝、眼疾、脚氣、痺麻、質斯等の患者にして、春之養蠶家多く、夏の農家、官吏學生多し、秋は四民群集して、その熱鬧殊に甚だしく、之に反して、初冬の避喧は人に多しとす、而して此間最も雜沓を極むるは、九月上旬より十月中旬にして、三、四、五月之に亞ぎ、頗る寂寥を覺ゆるは、十二月より翌春二月までの間とす

管内の浴客の重に仙臺以南は諸郡より來り、黒川、牝鹿の二郡之に次ぐ、管外にては福島縣の北部過半を占め、山形縣東、西南は三置賜及び村山は四



郡も亦多まどす

交通

郵便局は遠刈田にあきて爲換金事務をも扱ひ、此地に柱函を設く、集配度  
數の口々午前午後二回にして、東京其他各處の書信に、新聞紙に、皆日暮  
に至れを閱讀することを得、但十二月より三月に至る四月間は、浴客少  
きと以て一回の配達とす

青根温泉場より各地へ達する車馬普通賃金表

	遠刈田へ	川崎へ	宮へ	白石へ	大河原へ	仙臺へ
人力車	拾貳錢		四拾錢	五拾錢	全上	流車賃トモ 七拾錢
馬	拾錢	貳拾錢	三拾錢	三拾五錢	全上	五川崎通錢

全各地への里程概畧表

青根温泉場	遠刈田へ 一里十四丁	鎌先温泉へ 四里十八丁	山形縣上山 温泉へ七里	笹谷峠越山 形市へ十二里	福島町へ 十六里	不忘山越米 澤市へ十六里
ヨ	永野 三里十八丁へ	秋保温泉へ 五里十八丁	作並温泉へ 十里	不忘山越 山形市へ八里	福島縣相馬 へ十八里	

詞藻

此地開湯以來己に四百年と經たり、之を古記に徴するに、享保三年より寛  
政元年に至る八十一年間に、國守及び夫人の枉駕するもの前後凡そ十四  
回一門一家に輩に至きて、殆んど十三家の多きに至る、故に別に殿閣を  
造營して青根御殿と稱し、以て國守の旅館に充てたり、此間鴻儒名僧は陪  
從遊浴するもの頗ぶる多く、隨つてその遺墨も亦尠しとせず、今左に一二  
と摘載とす

藥師堂奉納和歌

仙臺中將吉村朝臣詠歌

大年 釋 香 國和韻

山時雨

名殘なくとれぬる山のむらまくれあゝるの雲のわともどめなて  
酷愛山間景物幽、不時雨脚度村丘、晨興眺望風晴霽、幾片殘雲跡不留

青根温泉

夜落葉

ひかひ見る月のためとやよなくにおち葉といろく軒のやま風  
半鈎新月入簾櫳、暗喜明朝涉彼崇、支枕頻驚翻作雨、開門是葉落山風

初雪

山のはや降そむる雪のあいたにもふもどれ里やまたまくるらむ  
山窓起坐聽蕭々、正是千峯初雪朝、不待一番寒徹骨、催梅獨自步焦燒

名所雪

雲をさへふりうつむかどあくる夜のいこまれ山そ雪にくまなき  
富士終南海國殊、江天連作雪銀區、東西隔越名唯在、南北平鋪疆亦無

深雪

まもきやきわらきまたれ、吳竹れちいろの陰をゆきにむまれて  
形雲密布雪皚皚、平地少焉三尺堆、想見前村梅破玉、清香一段未隨埋

初戀

るいをなき思ひを人にあけそめてこゝろとはよふ戀のやまみち  
一從偷眼見清揚、思服悠哉寐與寤、報章焉得形管貽、忍山嶮處藉爲路

待戀

まちに引琴の調へも聞やいろにまたまつ夜半のすさみなりどの  
朦朧月色掛藤蘿、如此蕭々良夜何、幾剔青燈人不至、鐘隨更盡度山河

契戀

くらへても猶はかなまややどり木れねもみぬ中の契りはかりの  
君子借老宜副筭、鄂不韡々懼唐棣、其具如蘭和斷金、二人固有同心契

山

たる秋の木々やいつれとわかぬまにかゝるなかめの雪の山うけ  
側是峯兮橫是嶺、遠近高低不同景、幽賞何必離山中、不妨歩々入清影

浦

うちそよくいり江のわいのうら風に夕なみかけて千鳥なくなま

青根温泉

看尽歸帆苦屋裏耳聞眼見盡無聲、惟聲任爾衡陽斷、別有蘆邊田鶴鳴

旅

にさはふや野山の末も道ひろく戸さしなき世のたひれゆき、は  
裏浪千里淑装嶺、人不爲警道自恢、好個太平時節子、謳歌聲裡去還來

山家

世をうしどのかれし山のおくにたに通ふこゝろの道はのこりて  
數椽茆屋倚林間、綠水青山眼界寬、安得萬緣都撥置、且來此地養衰殘

閑居

らにのこな勾ふはかりに人めなきむくらの宿はあきとまもなし  
洗耳清冷憶許虫、一瓢高掛樂清幽、人間曆日渾無用、閑裡任遷春與秋

祝

幾世ともかきりはあらし岩の根にわきて出ゆれたえぬなかれの  
奥稱天府國君有、佛是琉璃光庇優、珍重仙城盤石固、黃河長與此泉流

十一月初五日歸山翌日登城叙謝呈上所述甚愜台情特蒙垂青即令予騰  
寫寄鎮瑠璃光堂將命有司裝潢以賜予以不啻國字爲辭尊君曰吾以手書  
和歌爲扁額已奉納矣今記已成詩已作連予和歌一筆而書何必相雜他人  
墨痕于其間哉不論巧拙書之可也因退山房併添臨歸降使一段呵凍漫揮  
以應台命而已後之覽者一知一罪我無辭焉享保庚子仲冬長至前

仙城兩足山主蓮香國手書

神無月のころ青根山のゆあみに來りあるにおなしくほこをり香國  
和尚此山さどまで尋ねとこれけれの悦れあまりに

仙臺中將吉村朝臣

おもふそよかゝる太山の雪れうちにとひこしひどの心ふかさを  
青根山入湯の日かすみちて府にかへりける後二日三日すた待りて  
雪の降りけるに香國和尚の跡にとまられけるをどふらひつうは  
すどく

これ頃のやま路の木々にくらへてはつもるも淺死庭のまらゆき  
さとはまた霜かど見るもぬてふこゝあとは幾重れ山れまらゆき

青根山藥師堂奉納和歌原作三十首  
今録二十首

年比ねちけむつらひしう氣をぬさき動氣あといふものゝて世れう  
きふしの事まけく國務など心いれてかううへぬれものにくしこ  
ゝろもうとくゝしうなりつゝかくての末久に國家をたもたむ事も  
ねほつかなくれふやけ私のくすしどりく打あつめ療養し待れど  
はかくしうもさはやきおほゆる事もなしすまやらの温泉あまた  
あるかなかに柴田郡青根なりける湯はむ死てかゝるたくひの病に  
いみまうまるとありて祖父君もふよゝひ迄こゝにゆあひ給ひてよ  
りこゝろもささやき給ふなれの予もくまはやくすゝのすゝめけ  
れと明和三つれど一秋も中年なる比くみうめてよまこのかた過に  
一年迄に四たひあゝにきにけまその験にやあまけむ年をつみ月を

かそへて病もやうくおこたりぬれどもすれのかれ物にくゝて  
むをほらるゝやうに覺ゆる事のやみかたくやかて老のそゝめも近  
づくからにかくてのいけかこの病のそきてむどかをひなりつゝこ  
たみも長月の末つゝたとり三冬たつそゝめ十日あまり迄浴しぬる  
得どに五たひのかすにをなきは分て其靈驗あらむ事とねかふとて  
南無藥師瑠璃光如來我病全快をさせ給へといふ事を句の上に置て  
秋より冬かけてれけしきこの里に名ある山川などとりそへて三十  
首の和歌とさゝけ奉るそ花になく鶯水にすむ蛙のこゑにたくひて  
も心をたねとずるまことをは神も佛もあはれとうけひきたまはさ  
らめかを

くれとこととさまけき世のうさも忘れてあかぬ山のれどけき  
かひつゝいく日もあかぬから錦たちぬふ山の木々のぬるこさ  
まゝの紅葉の中にこきませてまつも一きはぬるどそひぬる

くたしみるふもとれ山のそなたより朝日か、やく海のさやけさ  
 類いもあらし去つめる塵のあり数も讀盡すまですめるつはゆと  
 里ちにあふものとや今も笛たけの音にかとひくるみねのまつ風  
 くみてなをあふくもたかこの山のるりの光のさよきつは湯の  
 とる秋はなかも今は冬かきてゆきまつやまの木々のあさしも  
 うかりけるものともいまのまらさりき枕の山にねつるあらしも  
 にしきかどまのひし山れもまち葉も枯てさひしき谷のまたみつ  
 いは根ぬみかさなる山をむけ越てかよふやいかに冬のかりひと  
 やますみに馴てそ今のまつのかせ灘のひしきも夜半のともなる  
 日れかけと見るを得と冬はなをのき端を暗らさやまの下庵  
 曇りなく見おろす山れあるか中に我すむかたそこ、ろひかる、  
 となふされやまは名れみに冬さひてた、白雲をとるのおもかけ  
 いままはしさをひもまよや雪みそれ見をむる軒におつるやま風

せきどめしするの、小かそ水かれてむるもやす死冬のたひ人  
 たにの戸をやま風いたく吹くからに軒れつら、も解るひまなだ  
 またもまむものとは知をと住なれてかへるなこ里は深死やま里  
 へたてなくめくみやか、るくに民をゆき、賑ふるりれつを湯は  
 また軸のうたに祈念の心を

このたひの病れそ死てとことばはにこ、ろをのやくえるしをも哉

安永七 戊戌 歳十月十一日

從四位上左近衛中將重村敬白

散策地

物見岩 浴場の西、十丁許にして物見岩あり、山勢甚だ高峻ならずと雖、  
 も風光の絶美に至りては亦譬ふるにをのなく、四望豁然として、眼界は達  
 そるどころ遠く数十里の外に及び、その豆八寸馬の布置、丈山尺樹れ濃淡  
 の皆以て畫家の好粉本たり、古來青根温泉を勝景と以て疾病を癒するの

のり、人初先は之を信せず、一たび此に登臨して後過賞にあらざるを知  
 こ云ふ、山中産する所の白石英の其質透明玲瓏として希世の珍たり故  
 独人墨客の眷愛を享くこと殊に深し、續紀に元明帝和銅六年五月柴  
 仰より白石英と貢ぐ云々、俗にこれを六方石と稱す、その山麓に金鑛堀  
 の舊洞と存す古歌あり

仙臺中將重村朝臣

りのほる山てふ山の峯のうへにそれと物見ればはすともしれ  
 志山 木名と刈田岳と云ふ、山中に役願行開基の藏王權現を祭祀せる  
 以て藏王山と呼び又五彩山ともいふ、延喜式神名帳の所謂菊田嶺の大  
 はりしが、今の郷社に列せられ、水子神社と號す、本土中央大山脈中の惣  
 火山にして、南方第一の大岳たり、海面上凡そ五百六十一丈と抜き、峯影  
 向く蒼穹を逼り、山根は磐城、羽前兩國に跨がる、青根浴場とり正西二里  
 此で中腹の賽河原より一里内外とす、昔々佛教の熾なるや私りに神

號に換ふるに藏王權現れ名と以て之、山と冥府に擬して劔ヶ峯灰塚、三途  
 川等の異名を附せり、絶巔に一湖あり、藏王沼直經三百三十間と云ふ、俗に  
 御竈と尊稱す、即ち噴火窟孔にまて水色藍の如く、その底測るべからず、近  
 郡の士民茲に賽するもの毎歲數千に多きに及ぶ、故に八、九月に至るを浴  
 場も亦喧囂を極む

賽河原の凡そ方半里に亘る裾野にして、巨細の燒石、堆積散布す、則ち詣者  
 先導、飯小屋れある所に、これより山麓に下れば、森林一圓に繁茂、玄植  
 物界れ第四帯を成せども、以上の第五帯に變ずるを以て、只僅かに偃松の  
 蜿蜒とまて、毒碗に生ずると見るれみ、而して淵底は絶えず積雪を存し、到  
 るところ鳥聲と聞かず、之に反て、森林所在の山中に、異草生、怪禽栖  
 み、又礫石に富む、故に博物學に従事する人にまて、一たび登山探掄れ、勞を  
 辞せずんむ、其利するところ極、幾て多からん、綱村公の歌に  
 く、にたみのあまねくみちの奥なをえ猶つゝしみを且すれすの山

有邪無邪關 浴場の北笹谷峠と野上の中間にあり、今猶は古關と稱す。東史に文治五年八月十日、大木戸戰敗れて主將國衡大關山を踰えて、出羽に之かんと欲と云々、蓋有邪無邪關は別名なり、頂上に觀音堂を安置す、眺望の奇實に言ふべからず、古歌に

土御門院御製

たれみ來一人の心もあはるやと問ふても見とやうやむやれ關

俊賴朝臣

すくせ山などいなむやの關をしもへたて、人に音となかすらむ

宗良親王

たけりふかきとやくとりの道とへは名にさへ迷ふむやむやの關

仙臺中將重村朝臣

關据ゑしわとさへそせとらやむやの雲を戸さしのみねれ通ひ路

### 社寺

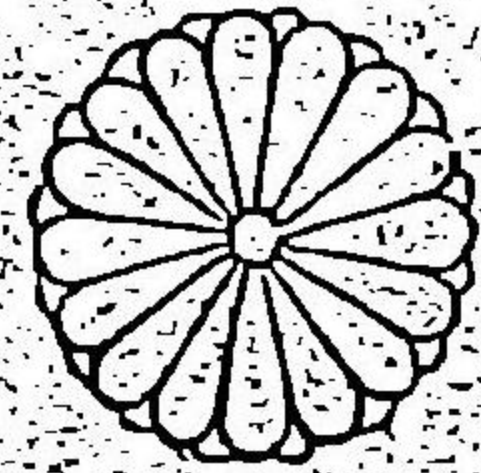
温泉神祠 大湯の西にあり、堂之東面九尺造にして文化十二年十月朔日の建立に係とせむ、其開基を詳らかにせず、本尊は青銅藥師佛にして、軀長尺餘、蓮臺又端坐す、堂右の石階數十級を登れ、上に平地あり、十數人と坐すべし、遠望頗ふる可なり、茲に入雲神社を祭る

### 物産

木地類 薪炭 菌蕈類 薇 山獨活 河鹿魚 いはな魚 白石英 硫黄等なり

宮城縣陸前國柴田郡  
川崎村青根温泉場

### 温泉宿



宮城縣仙臺市大町五丁目  
大内源太右衛門  
八ッ橋連理織別記之通  
獻上ニ付夫々  
御前へ差上候條此旨相  
達候事

明治廿三年四月廿九日  
宮内省

別記ハ恐レ多キニ付特  
ニ之ヲ省ク  
右殿殊命微衷貫徹不堪感泣謹  
寫此文以爲扁額日夜拜  
聖恩優渥

古來仙臺ノ特産タル八ッ橋織ヲ弊店昨明  
治廿三年第三回内國勸業博覽會へ出品シ  
前記有功賞ヲ賜セラレタルニ付此鴻恩  
ニ奉答セシカ爲メ更ニ連理織ト稱シ窓幃  
車被ノ男女帶地及帛紗ニ應用スヘキ新奇  
高尙ニシテ且ツ經濟上尤モ利得ナル一種  
ノ袋織ヲ發明シ曩ニ宮内省ニ献上セシニ  
忝ナクモ上記ノ恩命ヲ蒙リ猶ホ有栖川  
宮小松宮北白川宮伏見宮四殿下ヨリモ夫  
々御賞詞ヲ辱フセリ實ニ弊店無上ノ光榮  
ナリ依テ今般多數ニ製造シ低價ヲ以テ博  
ク高需ニ應ゼント欲ス世ノ紳士貴嬪希ク  
ハ一顧ノ命ヲ垂ラレシコトヲ  
弊店製造ノ白羽二重ハ明治十八年東京府  
繭絲織物陶漆器共進會ニ於テ六等賞ヲ織  
物標本及ヒ神代紙ハ共ニ第三回大博覽會  
ニ於テ褒狀ヲ享ケタリ  
夫レ弊店ニ於テ從來博シタル信用ト名譽  
トハ實ニ斯ノ如シ四方ノ花客普通ノ同名  
異質ノ織物ト同一視スルナクハ幸甚

宮城縣仙臺市 大町五丁目 大内源太右衛門



吳服太物類卸小賣

追日鑛泉遊浴ノ佳期ニ際ス故ニ衛生家ハ溫泉案内ノ必要アラン

第二回内國勸業博覽會褒賞證

宮城縣仙臺市大町 大内源太右衛門

組織齊整絲質佳良ニシテ時好ニ  
適ス其有功嘉賞ス可シ

有功三等賞

官 查 審

藤生 佐吉郎  
下城 彌一郎  
奧村 佐右衛門  
萩島 信吉  
阿部 孝助  
平賀 義美  
從六位 前田 正名  
審査部長 從四位 勳三等 九鬼 隆一  
審査官長 從三位 勳三等

# 白八ツ橋織



前記ノ薦告ヲ領シ茲ニ賞牌ヲ授  
與ス  
明治廿三年七月十一日

總裁 大勳位 貞愛親王

弊店ニハ簡明ナル管内溫泉案内ヲ備置キ以テ花客諸君ニ進呈ス

明治廿四年七月廿五日印刷

明治廿四年七月廿八日出版御届

正價金七錢

## 版權所有

著作兼  
發行者

永澤 小兵衛

宮城縣仙臺市狐小路十三番地寄留

印刷者

中津川 勝三郎

宮城縣仙臺市大町三丁目廿三番地

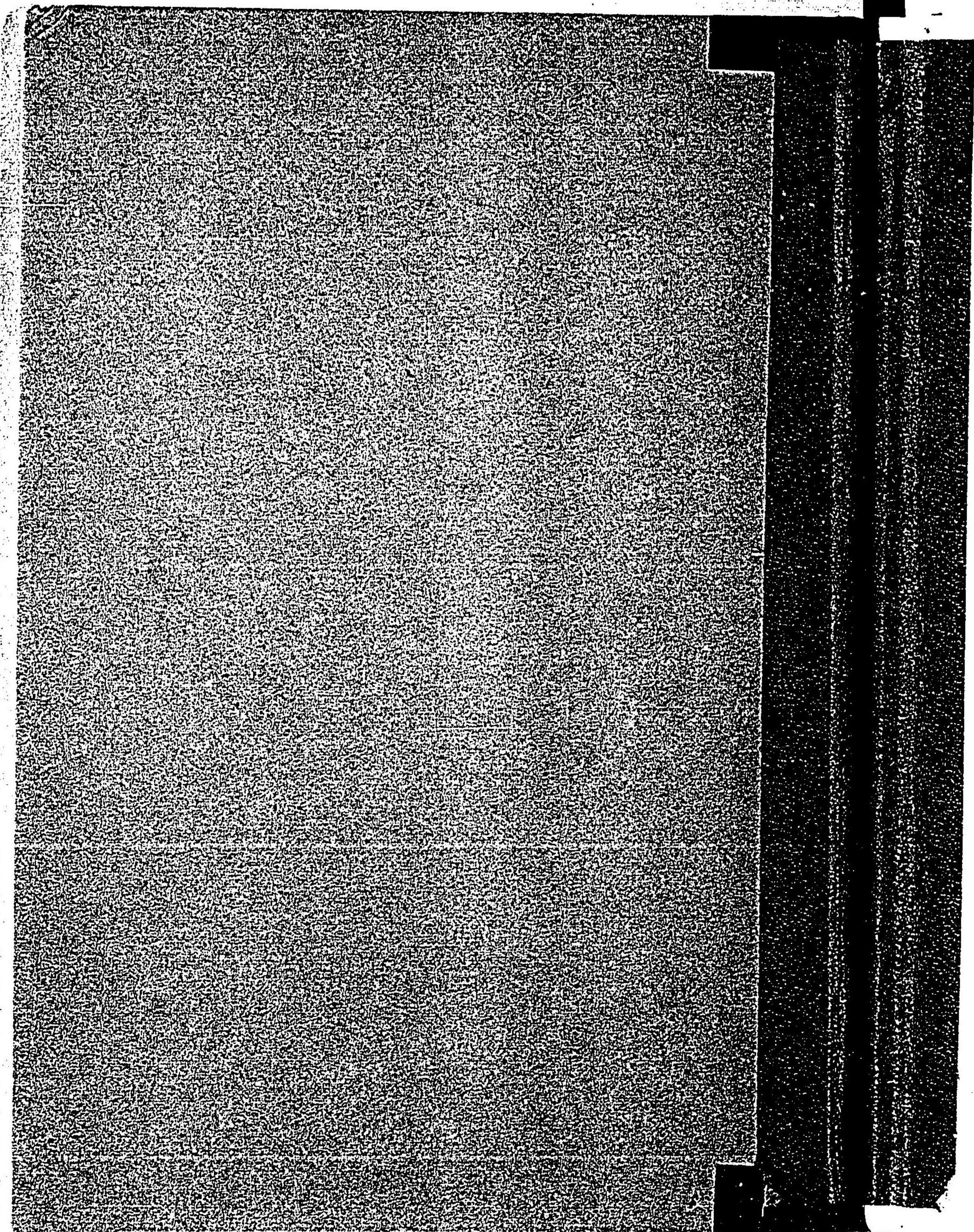
印刷所

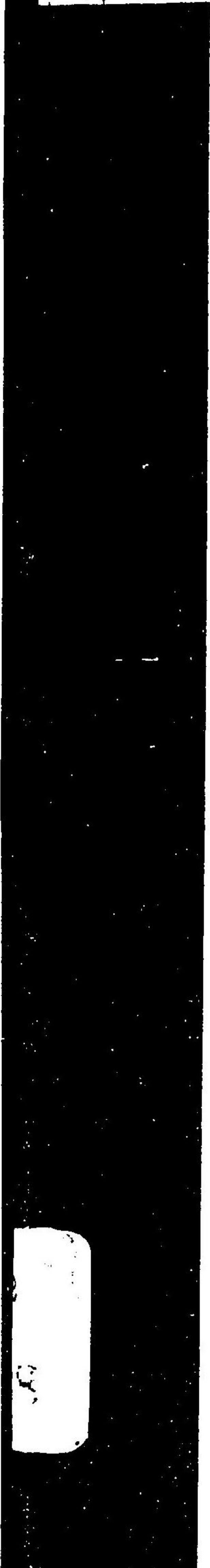
弘文館

宮城縣仙臺市大町三丁目

仙臺市大町五丁目大内商店

CT-25





67

67

青根温泉誌

永澤小兵衛

国立国会図書館

023301-000-8

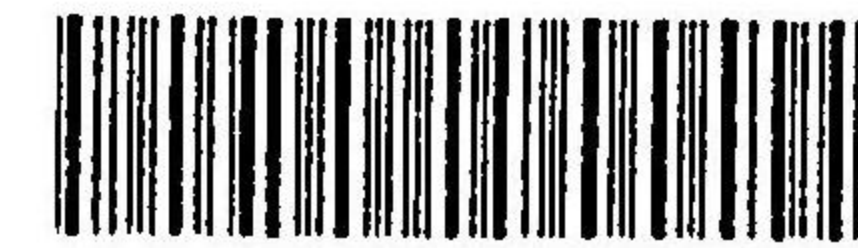
特52-338

青根温泉志

永沢 小兵衛(蓑笠学人) / 著

M24

ADC-0182



特

3

